

あの日の頃 - 16

高木信明

私が目黒星美学園小学校に就職したのは、一九八五年(昭和六十年)四月のことです。十年ひと昔というのに、干支の一回りが終わろうというのですから、時の過ぎるのは本当に早いものだと感じます。

小学校の先生という楽しく素晴らしい仕事をしたくてたまらずに学生生活を送っていた私が、やっと見つけたのが目黒星美学園小学校でした。折りからの教職ブームも手伝ってか結構な狭き門でもあり「先生になれる。」と決まったときのあの嬉しかった気持ちは今も大切にしているつもりです。

大学を出たばかりで学校現場のことなどよく分からず、そのくせ血気盛んで人一倍よく喋る私に、シスター杉村校長様が初めにおっしゃった激励の言葉を今もよく覚えています。「本校で教職に携わり子ども達と共にいてくださる先生方には、次の三つが保証されます。それは仕事と食べる物と、天国です。」

友人達にこの話をすると、「怠け者のおまえには天国だけは無理だな。」と大笑いされました。冗談はともかくとして、天国が保証されるだけのその責任の重さを思うと笑えず、一人で気合いを入れ直したことも度々ありました。このときの校長様の物静かな表情から、温かさとその職業のもつ厳しさを教えていただいたように思います。

自分では周りを見ても何をしてよいやら分からず、手当たり次第に物事に手を出していた私に「教師という仕事をするからには、教わる立場から教える立場へと頭を切り替えていく必要がある」と、当時は教頭であられた大森先生に初めに教えていただきました。それを聞いて頭の切り替えがうまくできるかどうかを不安に思いながら、一番始めの仕事である新一年生の入学準備のお手伝い(らしきこと)を無我夢中でやった記憶があります。教師修行には、落語を沢山聞くのもいい、と教えてくださったのも大森先生です。

四月のある日「正門の前に脚立を持ってきて。」という林田先生の言葉に何事だろうとついていったところ「えらい方がいらしたのでおみやげにするから」と桜の花が見事に咲いている枝を一本、素早く切り落とされたのでした。星美での私の力仕事の一回目はこの桜の枝切りでした。

新任の年は、図工と社会の専科としての授業をしながら、学校内のいろいろなことを勉強させていただきました。特にあの一年間で海浜学校に始まって山中林間学校まで、四つの合宿に参加させていただき、教師として大切なことを学ばせていただきました。

それぞれの合宿で思い出に残っていることを思いつくまま書いてみたいと思います。

海浜学校では、子ども達が先生方と本当に仲良く伸び伸びとはしゃぎ回っていたのが印象的で

した。神父様がヤドカリを観察用に殻から出してあげよう、とライターの炎であぶってくださいました。ところがタイミングが悪くて死んでしまい、子ども達は戸惑いながら神父様を慰めていました。

五年生の尾瀬高原学校は事前に、下見に行きました。林田先生と石川先生は朝五時前から楽しそうにタラの芽取りの準備をしておられました。連れていってもらおうと、片品スキー場の横の誰れも登らないような斜面を駆け上がって探したりして、実地踏査のいい準備運動になりました。合宿の本番でも担任の石川先生、会田先生、シスター望月は、元気一杯の子ども達に負けじとばかりに張り切っていたようでした。

また、A組担任の石川先生が、夜中にいつまでも騒いだり暴れている子を上手に指導して見事に鎮められた姿は、とても印象的でした。その後は、薄暗い廊下にしばらくの間あぐらをかいて座り、タバコを吸いながらそれぞれの部屋の様子を寂しそうに見ておられました。今だったら話相手に一緒に座っていたかもしれません。

六年生の志賀高原学校では不覚にもセーターを忘れ、寒さから体調を崩しました。迷惑をかけてはいけないから、と一人で力んでいる私に担任の宮下先生、石松先生、シスター吉田、図工科の山口先生が大変温かな言葉をかけてくださいました。また朝の御ミサには引率の先生方が全員参加されました。子ども達の管理は?とうかがうと、皆良い子なので必要ないとのこと。子ども達を信頼しきっていたこの言葉を聞いた時から私の児童観は変わり始めたように思います。

続く三年生の山中林間学校では、佐々木さんの運転するスクールバスで、おばさま方と子ども達の荷物と一緒に、観光バスとは別働隊で参加しました。志賀での不調がぶり返し、今度は合宿の場で寝込むという不覚ぶり。窓の外からの明るい声を聞きながら、教師たるもの何時、何があっても即対応できるような体力をつけなければ、とつくづく思い知らされたのもこの時でした。

二年目には入学したてのフレッシュな一年生の担任に。子ども達同様、担任としては右も左も分からない一年生でしたから、いろんな事がありました。

休み時間が終わり、一向に戻ってこない男の子達に「そんなに勉強がいやなら遊んでいてよるしい」と言ったら、またワーイと行ってしまっって連れ戻すのに困ったこと。

秋の遠足で、動物を見るのに夢中になってしまった子達を並べているうちに他のクラスがみんな行ってしまい、子ども達の先頭に立ったままで右往左往し公園中捜したこともありました。

そんなある日、おこがましくも学年主任の富田先生にどうしたら子ども達を上手に導けるか、旨いやり方を教わりに行った事がありました。その時、そういう事は人に聞いてできるものではない、研究と試行錯誤、沢山の体験の末に自分なりのやり方ができる、というお叱りかきともとれるアドバイスに、途方にくれる思いでしたが、忙しさにかまけて、加えて不安とあせりから何でも安直に答を出そうとする気持ちを断ち切っていただいた気がします。

そのくせ、その年の三月、風疹にかかりドクターストップ! 子どもは出席停止でも大人はいいだろう等と甘いことを考えていましたが、当然の事ながら学校に行ってはいけないとの診断を受けて

しまいました。授業にも穴をあけ、子ども達が楽しげに練習していた初めてのお楽しみ会も見られず、医者に安静にと言われても時間がなく通知表を書くために二日間徹夜したこと等、やはり「天国を保証」される資格はないな、と反省ばかりしていました。ですから「あの日あの頃」というと失敗ばかりが思い出されてお恥ずかしい限りです。

何かといたらない新任時代でしたが、子ども達の味方になりたくて選んだ仕事なので、これからもそうあり続けたいという決心は変わっていません。

これから先、学校の様子もいろいろと変わっていくことでしょう。それでも、これまでと同じく目黒星美学園小学校が子どもと共にいることを本当に大切にしている学校であることは変わらないことと思います。

卒業生の皆さんが卒業後の様子などを話してくれるのを、これからも楽しみにしています。ぜひ、元気に遊びに来てください。私も子ども達の笑顔を大切にしながら、目黒星美学園小学校で待っています。ドン・ボスコのようになりたい、と願いつつ。

【同窓会報、第16号・平成9年4月1日発行・から転載】